
我の幸福をあなたに

usa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我的幸福をあなたに

【NZコード】

N6379Y

【作者名】

ussa

【あらすじ】

工藤新一 工藤蘭 共に二十歳

嬉しい知らせと共に、二人の間に事件が起きる。

『だつて彼女、ウザいし? キャハッ』

一人の少女が蘭を追いつめていく。

新
蘭。 結婚してい
る設定です。

「」せとある洋風の屋敷。

一組の若て男女が、何やら話しあっていた。

「そんでも、ホームズはな…」

「あーはーはー。もうですか」

瞳をキラキラとむらむる青年と反対に、彼女はつざり顔。

「もっと話しておべべき」とあるでしょ

「ん?あ、あ…」

彼女が強て口調で言つと、彼の歯切れが悪くなる。

「でも、さすがに早いだろ…」

「だーめー後回しにしたら、新一絶対はぐらかしちゃうから」

新一は苦つ切つた表情でコーヒーを飲む。

「そんな不味そうな顔したら捨てるわよ

「じょ、冗談だつて」

カップを取り上げようとする蘭の手を、新一は慌てて止める。

「お前は、いいから座つてうよ」

「…わかつました」

蘭はそのままして、ソファに腰を下ろす。

「……しても、アイツら遅すぎだろ……」

新一は時計を見つめた。

時刻は約束の時間を一五分過ぎ、一時四五分。

「じょうがなこよ。来てってこきなり言つた、私達が悪いのよ」

「そうそう」

「やつぱりやつなのか……」

ん?

今、一人会話に紛れ込んでいなかつたか?

「……黒羽。テメ……」

「……だろ、別に。鍵かけてなかつたそつちがわりーんだからよ」

黒羽快斗は反省した様子もなく、ソファにひっくり返る。

「やめてよ、快斗……」「工藤君ちだよ」

青子は快斗を窘めつつ、自分もちやっかり腰掛けている。

「不法侵入だぞ、全員」

「んな堅いこというなや、工藤。いつわは来てやつたこやぞ」

服部平次は新一と肩を組み、黒い顔とは対照的な白い歯を見せる。

「せやねど、あたしらなんも言わんど、急に入つてしまつたし……」
んな、蘭ちゃん」

和葉は申し訳なさうに蘭に謝る。

「私達はここによ。無理言つてきてもうりつたんだし。今、お茶持つ
てくれるから……」

「あ、オレが行くから、座つてろつてー。」

立ち上がりかけた蘭を再び座らせ、新一はキッキンへ向かつ。

「なんやの、工藤君。 今日はえりに優しくやん

「そ、そつ?」

和葉が不思議そつに言つと、蘭は曖昧に返す。

「こりゃ、何があつたな

「何かつて?」

ボソッとつづやべ快斗に青子はたずねたが、快斗は答へない。

「そんで、工藤。何でオレのこと呼ぶだんや?」

「ん? ああ……」

新一は全員の前に飲み物を出すと、ひとつ咳払いをした。

「え、えーと、オレ達はもう一十歳で、皆それぞれ結婚した……だろ
? そんで……まあ、その……」

「どうせん歯切れが悪くなつていへ新一。

蘭が急かすよつこ小突いた。

もつて一度咳払いをし、新一は言つた。

「まあ……つまつ、オレのこだな……」

伸び言葉に詰まる。

すると、業を煮やした和葉が言つた。

「苟々わせんとこい。男なら黙りこくへ、はつやつ語つたりどつなん
？」

隣で青子が頷く。

「あ、あー……えーと……つまつせつこい」とだよ。ほひ、

「そんなんでわかるかい！」

「オレらは超能力者じやねえぞ」

平次と快斗が突つ込みをいれる。

「いや……別に……その……」

「もういいわよー私が言つから」

蘭がそつぱつと、新一はよつやく決心がついたよつだ。

「たよつとお前らに報告があつてよ」

蘭の肩を掴んで落り着かせると、やっへつと叫んだ。

「オレと蘭に…

「子供ができる

本日も、工藤邸は賑やかです。

Happy 1 (後書き)

こんにちは、USAです

新連載です！

黙文で時々意味不明ですが、どうぞよろしくお願いします^_^(一へ)

新一からの衝撃の告白から数分。

ようやく客人四人は静かになりかけていた。

「ま、まあ、おかしくはあらへんもんね
「うん。蘭ちゃん、おめでとう」

和葉と青子は真っ先に祝福の言葉を述べる。

しかし、平次と快斗は新一をからかう方で忙しいらしい。

二人はそろって新一を小突いていた。

「もう！子供なんだから
「ほつとこ。それより蘭ちゃん、お腹触つてもええ？
「青子も…」

二人は蘭のお腹に耳をあてた。

「まだ早いよ。一ヶ月だもん
「でもええなあ蘭ちゃん。もうお母さんになつてまつんやね…」

和葉がしんみりと言った。

「お母さんか…「うりやましいな
と、青子も言った。

「二人だつても「すゞぐだよ、きつ」と」

「そつかな…」

「うん」

そこで、チャイムの音がした。

「ちょっと出でぐるな」

新一が玄関の方へ向かう。

その背中は少し誇らしげだった。

「工藤のヤツ、赤ん坊できたら性格変わりよつたな

平次がぼそりと快斗に耳打ちした。

「そんなもんなのかねえ」

しかし、一人のだけた会話もそれまでだった。

「ほら、さつさと運んで…」

「早くしなさいよ」

命令口調の声とともに、誰かが中に入ってきた。

「んな」と言つたつて、重てえんだよ…」

後ろからはよろよろと大きな荷物を運ぶ、新一の姿。

そして、そのまえには鈴木園子と宮野志保。

一同は啞然としてその光景を見ていた。

「そ、園子…何なのその荷物…」

蘭が口をパクパクさせながらたずねた。

新一は近くにその箱をおくと、ため息をついた。

「何って、お祝いよ！決まってんじゃない」

園子はニヤニヤしながら、箱を開けた。

中にはシャンパンやらワインやらがふんだんに入っていた。

「久しぶりにみんな集まつてることだし、パーティー盛り上がりついで…もちろん、おめでたの人はジュースよ」

すっかり親友になつていた志保も、蘭に微笑みかけた。

蘭も笑顔になり、礼を言つた。

「ありがと…」

「そうそう。これ、博士からのプレゼント」

志保は同じ箱から、何やら大きな機械を取り出す。

「な、何それ？」

青子が皿を点にさせた。

「自動裁縫機つて聞いたわ。これから子供の服とか必要になるだろうからつて。この中に布を入れればいいんですって…」

「ほ~。そんなら試しに入れてみよか」

平次が面白半分に、自分のハンカチを入れた。

「やめた方が良かつたと思つぜ…」

と、新一は言った。

「何でや?」

だが、答えを聞くまでもなかつた。

その機械から、作動音とは別の音が聞こえてきた。

そのうち音は大きくなつていき…

「おわつー?」

「きやあつー!」

「…な?言つたろ?」

爆発し、見るも無残な姿となる阿笠の発明品と平次のハンカチ。

その場にいた全員が呆然とする。

「と、とにかく、今日は蘭のおめでた祝いだし、皆で飲もう!」

園子が慌てて取り繕い、グラスを配りはじめた。

志保がそれに、シャンパンを注いでいった。

ただし、蘭はジュース。

和葉と青子も遠慮した。

「それじゃ、蘭と新一君の子供の、誕生を祝して…」

乾杯、という前に、再びチャイムが鳴った。

園子は上がっていた手を下げる。

「今度は誰やろ？」

「またお祝いに来た人かな？」

和葉と青子がほのぼのと言つた。

思えば、このチャイムが、すべての悪夢の始まりだった。

新一は三度田のチャイムも鳴じむ」となく玄関を開けた。

「はい？」

「あ、あの……」なんとか

新一はキョトンとした。

田の前にさ、高校生ぐらこの少女と、衆らしき小学一年生ぐらいの男の子がいる。

「今日向かいに越してきた、沢田つてあります。えっと、今は両親は出かけてていませんけど……私は、娘の明輝あきで、これは弟の明矢あきやです」

明輝はぎこちなく愛想笑いを作る。

「あ、ああ、どうも……」

「これ、つまらないものなんですけど、ビーフが」

明輝は何やら小さな紙袋を差し出した。

「私と母が作ったケーキです。良かつたら、食べて下せー」

「ありがと」

戸惑いながらも、新一はそれを受け取った。

「お兄ちゃん、どつかで見たことあるーー。」

突如、明矢が新一を指差した。

「コラ！ 明矢！」

「いや、大丈夫ですよ」

ものすごい剣幕で明矢を怒鳴った明輝を、新一は慌てて止めた。

「すいません…」

明輝は謝ると、明矢を捕まえて無理矢理頭を下げさせた。

「痛いよお」

「人を指差しちゃいけないの！ 年上の人には敬語を使うのー。」
「…はあい」

明矢は納得のいかなそうな顔で言つた。

「どうしたの？」

蘭が出てきて、キヨトンとして姉弟を見つめた。

「ああ… 向かいに越してきたんだってよ」

新一は説明すると、二人を紹介した。

「へえ。姉弟？」

「そうです」

明輝はうなずいた。

「なんか… 「ナン君思い出せない?」

蘭が笑つて新一に言ひと、新一は少しガクつとする。

「「ナンなら」」といふぜ…」

「ゼーんぜん、 可愛くない奴ならね！」

「あの、 突然すみませんでした！ もう帰りますから」

明輝は落ち着きのない明矢の腕を掴んだ。

明矢は姉の腕から逃れようともがいでいる。

「仲いいんですね」

蘭が微笑むと、 明輝は苦笑した。

「年が離れてるんで…」

「おいくつなんですか？」

「七歳です」

「いえ、 明輝さんは…」

すると、 明輝は柔らかく微笑んだ。

「明輝でいいです。 私はこれでも二十歳。 大学一年生。 よく高校生ぐらいに間違われるんだけど…」

蘭は驚いたような顔をする。

「じゃあ同じ年だ！」

「本当！？わあ、良かつた！近くに同じ年の人人がいて」

目を皿のようにして笑う明輝。

蘭も笑い返した。

「良かつたら、上がつていかない？ちょうど友達と集まってるの。皆二十歳の大学生」

「いいの？あ、でも……」

明輝は明矢の方を見た。

明矢は目を丸にさせた。

「！」の子もいるから、やっぱり遠慮するね

「お姉ちゃん、なんでそんな悲しそうなの？」
「なんでもないよ。お姉ちゃん、超元気！」

明輝は明矢を撫でて、笑顔をつくった。

「らーん、主役がいないんじゃ始まんないわよー。」「めん、園子。今行く！」

窓から顔を出した園子に向かって、蘭は叫んだ。

「今日はちょっとパーティーやってるの。人数は多い方が盛り上がるし、皆いい人だから」

中からは明るい声が時折聞こえてくる。

明輝は窓と明矢を交互に見つめた。

しかし、やはり少しでも同年代の蘭達といたいのか、笑って頷いた。

Happy 3(後書き)

パソコンが直ったので更新
次回もよろしくです^_^(ーー)<

しばらくの間、明輝は他の女子たちと盛り上がりっていた。

「へえ。帝丹大学だつたの？じゃあ一緒にだつたんだ」

「本当？私、看護学科にいるの」

「私は法学部だよ」

偶然にも大学まで同じだったと気付き、蘭と手を取り合って喜ぶ。

「看護つことは、ナース志望？」

園子がたずねると、明輝は恥ずかしそうに言つた。

「一応ね。私長女だし、明矢もまだちっちゃいから、これから先両親の面倒見なくちゃいけないでしょ？だから、絶対に何が何でもなくならない職業に就きたいと思つてさ」

「しつかりもんやね。あたしとは大違いや」

和葉が情けなそうに言つた。

「でも私の場合、動機が単純すぎるもん。…といひで、今日つてなんのお祝い？」

「あ…それはね…」

青子が言いかけそうになつた所を、園子と志保が止めた。

「えつ？何々？」

明輝は不思議そうに一人を見た。

「何でもないわ。気にしないでちょうどいい」

志保はクールに言い返すと、青子に囁いた。

「彼女は、まだ工藤君が蘭と結婚してゐるって知らないのよ？」

「あ…そつか」

「もう少し黙つていましょ」

青子は「ぐつ」と頷いた。

「ねえ、ここにいる男の子達って、皆の彼氏？」

そんな会話にも気付かず、明輝は無邪気に聞いた。

新一達は、明矢のヒーローじみに付き合わされている。

蘭と和葉と青子は、一斉に頬を赤らめた。

「ま、まあ…そんなもんかな」

「近いかもしだへんね」

「うん…」

まさか夫婦だともいえず、曖昧に答える。

「あの三人、どつかで見たことあるなあ…」

明輝は呟くと、考えこんだ。

「もしかして、芸能人？」

「ちやうよーあんな色黒男、売れへんもん」

和葉が笑い飛ばすと、青子も快斗を見た。

「あんなバカイトが、芸能人になれるわけないし」

すると、園子も頷いた。

「あの推理オタクも同じね」

「大馬鹿推理之介よ」

蘭が訂正すると、明輝は笑つた。

「面白い人たち。好きなのに、言つてることが無茶苦茶だもん」

「そりかなあ？」

青子は首をかしげた。

「顔に書いてある。大好き、って」

その言葉に、再び三人は真っ赤になる。

「か、からかわんといで」

和葉がツンとしていった。

「そ、そういう明輝ちゃんは、彼氏とかいないの？」

「え？ 私？」

明輝は自分を指差した。

「ん~。あんま考えたことないや。今まで家の「」とで色々なしがつたし」

「でも好きな人とかはいるんじやないの？」

園子がニヤニヤとして聞いた。

明輝の顔色が、一瞬だけ変わった。

「う~ん。憧れの人だつたら、いるよ」

「へー。どんな人なん?」

和葉が興味心身にたずねる。

「んつとねえ、キラキラしててえ、クールに見えるんだけど、ちよつぴり子供っぽいところが可愛くつてえ、見た目とは違う、あつつい人！」

少し照れたように、明輝は言つた。

「それ、憧れじゃなくて、マジなんじやないの~?」

「やだ、違うよ」

「どうかしらん」

赤くなる明輝を、園子は小突いた。

どこから見ても、普通の恋をする普通の子。

だが、志保だけが彼女を鋭い瞳で見つめていた。

まるで、彼女の化けの皮を見抜こうかとするよつこ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6379y/>

我の幸福をあなたに

2011年11月23日16時53分発行